

小川為治著述

開化問答

上



近代語研究室  
資料用圖書  
購入

W31

O 24

1-上

1001168077

近研





小川 爲治 著述

開化問答

東京  
土書屋發行

24301



序

在光の塵を唯一字に照らして而して之を古語に  
 疑ふ其の大小怪見怖る是を棄てて之を棄て  
 唯これに於て其の如く其の如く其の如く其の如く  
 五部 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 一百

近代語研究室 入  
 資料用図書購



天子至地乃分道小則至以正火の政を施  
以實の蒼生の早福と謂ふ通し然る事一  
世の細民素は舊慣を固守し陋習を粘  
著する者何れ故に一政を行ふに成り守る方  
ありて之を驚おそむ者鮮しし然る事一  
事し怖る事と然る者鮮しし然る事一  
然る事一極勅然る事と起り治水  
乃事一以て起は然る事一代表統制を以て



たの者ある血税の字は以て取つて何理亦是  
則斯氏の眼孔重の如き振毫愛心の如く又亦  
之を以て未だ其の真理を透知する事能  
と出るに由る然らば則ち民の愚蒙能く終不  
そ乃理を知る事能はざるか聖の石より  
貴きこと正火れ改の徳備の如く是亦未  
人其れ亦是誠意の苟も之を事知る者  
孰きやその理を未だ能く知る人如



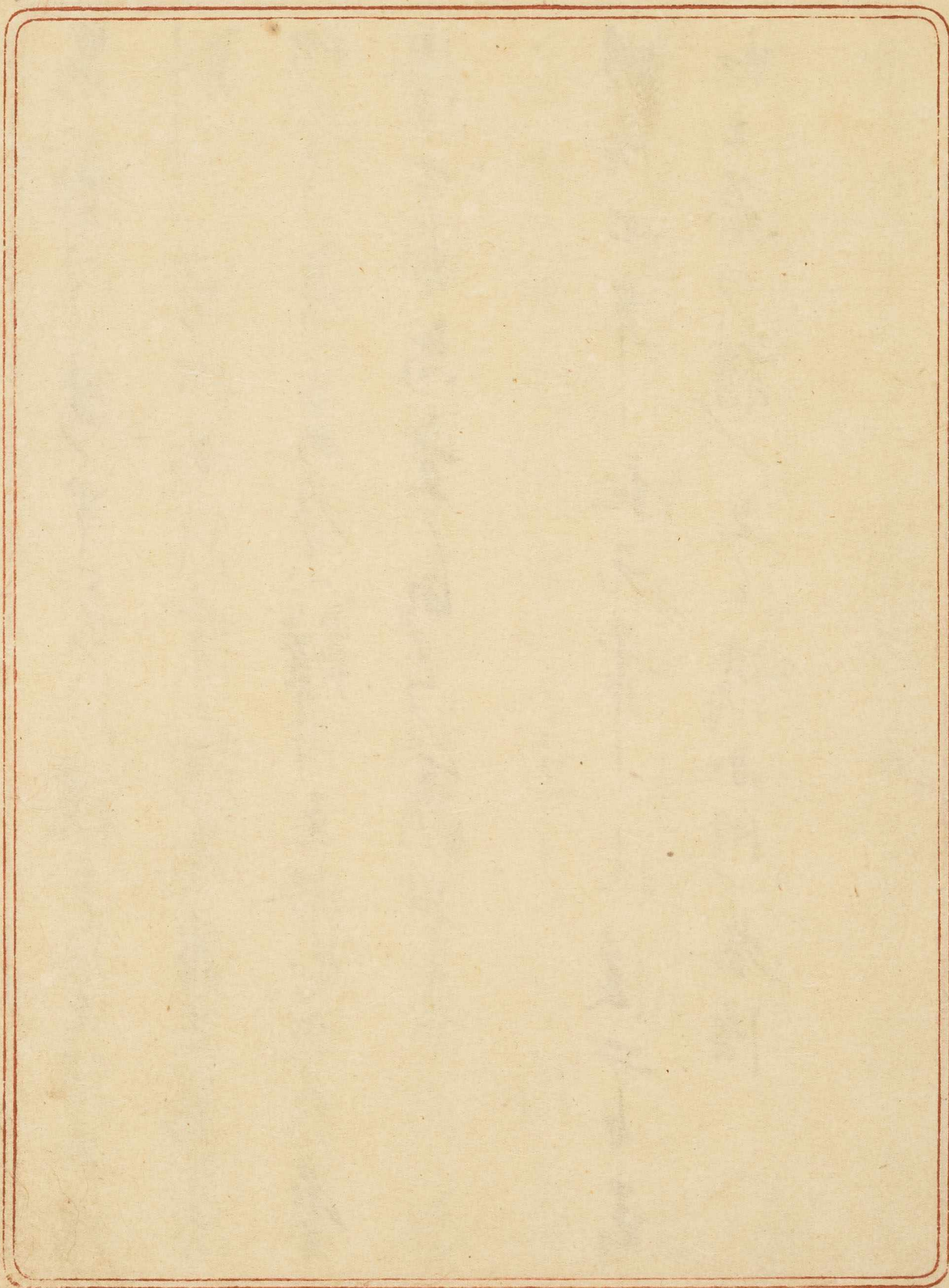
故子宜之之人古之好誨之在人之好禮也  
章之序序者興一為首越越  
下中樂一更其年之斯氏乎之  
矣者之雅究惟勢之有通一之禮舊  
平之開治即之古之禮儀也亦其  
遂之者小冊子成集者可以能孝  
嗚呼觀人此思是玉者無第凡其是床  
人若志之石在之能守之平一昔以之於能



異能 海の中を此 隣りたを深多須  
則 飛治郎此 香を燦し 厚く焦し  
以 之を 舊平の考ふ 難し 其好む其の 名を  
得る事 亦立 所らす 也

明治七年 紀元帝 此後 二日 玉  
虹玉屋の 標し 之を 後小川 為治







月  
乙  
月  
大

博覽會  
在





目録

- ① 藩を廢し府縣を置せしむる問答
- ② 門閥を廢し四民を混一せしむる問答
- ③ 全國より兵士を募問答
- ④ 租税の問答
- ⑤ 外國交際の問答
- ⑥ 學問の問答
- ⑦ 衣食住の問答
- ⑧ 鐵道傳信機の問答

小川為問答卷上



小川為 治著述 開化問答卷上

一 舊平

ナレト 閑次郎君当付の事ハ一向僕ハ令点う参りません  
 何故とらふふ先年公方様が法政事を天子様へ法政事  
 ぢきれ天子様が法自分少く天下の法政事をぢきるやう  
 ぢり外たあふハ萬事昔一乃仕来り予働ひ古風を守  
 て芽出度法事ハぢきるふと思へ居外た小思の外世  
 乃中の事がまるで昔一乃丸ぢきる第一大名とらふと此

問と問答

卷上

一

五 石 石 石



成唐せいとう一一諸國しよこくへ縣けんとらふものものが出来でき知事ちじとらふものが  
 此こゝ支配しはいをせしむトント昔むかし一一乃なほ代官だい官と自給じきつせしむ  
 率ひらておさむ僕めいが或ある先せん生せい亦よく少すく外げこゝを是こゝ追お大名だい名を置おけ  
 一一封建ほうけんとらふ漢土かんち乃なほ聖人せいじんの世よとらふ周しゅうの代よ杯はいも矢張やぢやう封  
 建けん乃なほ政治せいざいとらふとて封ほう建けんなれを自然じぜん主君しゆくんと百  
 姓せいじやうを問もん柄へい親しんとて且かつ代だいと世襲せいじやくの主君しゆくんが此こゝ此こゝ國こくを治ちるも  
 土地とちの風俗ふうぞくをものものとて又また自みづか分のぶん所持しよぢ乃なほ物ものとておとす也  
 かかののづづより仁政にせいを行おこなふやうなるもの事ことせられふひまの代だい  
 官くわんを累かさす百姓ひやくしやうを母はは後ごとらふ郡縣ぐんけんとらふ昔むかし一一秦しんの始はじめ皇くわう







の愚案ぐあん一いち寸考すんこうへても元公方様もとこうさま乃時代とき法代はふだい宿支しやくし死し  
乃百姓ひやくしやうより大名だいめいの知行ちかぎ所ところ乃百姓ひやくしやうの方が萬事ばんじ寛裕かんよ  
ふくちるの氣樂きらくの程ほど見み之の外そととされさる天子様てんしさまが大名だいめい  
を廢たし縣けんを法置はふおきたきけとい秦しん乃始皇しやうわうの真似まねを  
たきけとけりて終つひり下しも乃若あ乃な熟じゆく深ふかなりなることかと

覺ふ之ふ外そと

閑次郎けんじらう

ちるるど舊平きゆうへい人ひと足下あしもと乃法疑はふぎひを所ところむて出でがが奴僕やつやくも  
一時ひとときハハささややりり思おもひひ外そとのゆゑゆゑああらら先せん生せい小就せうじゆくくみみれれを



質たか一しととと迄せが先生せんせいの活あきふとと封建ほうけんをよい  
 杯さいとらら漢土かんち乃堯舜三代ぎょうしんさんだいたも周の代しゅうのよだのと引事ひきごと  
 ぬすねと世よの腐くさき儒者じゆ乃箸しの上下じやうじやうに言ことふをぐを  
 ざららされども漢土かんちも漢の世かんのより以来いらい今いま乃清朝せうてうの至と  
 るまでまでとな郡縣ぐんけんの政治せいぢもも此こゝに問漢もんかん乃王莽わうまうがが  
 宋そうの王安石わんしだだららととよ人物じんぶつの今いまの腐くさき儒者じゆ同どう様やう育よく  
 馨しんふ三代さんだいだの周乃代しゅうのよだののととよよ其制そのせい度どを真似まねた  
 人等ひとらておぎれれされどども郡縣ぐんけんををりりハ廢止やめするすよよととれ  
 出来てぬぬととよハ畢竟ひつぎやう封建ほうけんより萬事ばんじ都合つごふのよよききとと出でる



が何れゆゑでござれども今乃封建（いま ほうけん）を以てして人々  
 なるんども漢土の昔（むかし）の事（こと）はふとよきやうに思（おも）ひ置（お）け  
 乃者採（あ）を見（み）は又（また）これ大本（おんぽん）を知らぬやうでござれども先  
 世（せ）界（がい）萬國（ばんこく）より太古（たいこ）をたゞせむは皆（みな）今の蝦夷（えぞ）乃（なり）松（まつ）ふと  
 何（なに）も蠻野（ばんや）の風俗（ふうぞく）であらうさうにやうにせむは仲間（ななま）ふ  
 自然（しぜん）と衆人（しゆじん）の帰服（きふく）する商長（かうちやう）があらうと一群（ひとむれ）と  
 乃（なり）支配（しはい）をせし商長（かうちやう）乃（なり）上（かみ）ふを又（また）商長（かうちやう）が何（なに）も強（ちやう）んと  
 一郷一國（いつきやういつこく）を自由（じゆう）にする勢（いきま）であらうと外（ほか）とされが即（すなは）ち封  
 建（けん）のちがめふと封建（けんけん）はちやうと野蠻（やばん）乃（なり）風習（ふうしゆ）で



おがれそれゆゑ世<sup>せう</sup>乃國<sup>こく</sup>皆<sup>みな</sup>むけを<sup>か</sup>めハ封建<sup>けんけん</sup>  
乃政體<sup>せいだい</sup>ふ<sup>く</sup>われハ今<sup>いま</sup>乃蝦夷<sup>えい</sup>をも<sup>め</sup>亞弗利加<sup>アフリカ</sup>乃  
土人<sup>どじん</sup>杯<sup>はい</sup>の<sup>を</sup>見<sup>み</sup>るも<sup>も</sup>この<sup>こ</sup>と<sup>と</sup>で<sup>で</sup>おがれ<sup>おがれ</sup>日本<sup>にっぽん</sup>の  
天子<sup>てんし</sup>様<sup>さま</sup>より<sup>より</sup>ハ天照<sup>あまてらす</sup>皇<sup>みま</sup>大神<sup>おほみかみ</sup>宮<sup>みや</sup>様<sup>さま</sup>の<sup>の</sup>法<sup>ほふ</sup>未<sup>み</sup>ゆる<sup>ゆる</sup>ハ此<sup>こゝ</sup>世<sup>よ</sup>の  
人民<sup>じんみん</sup>を<sup>を</sup>治<sup>し</sup>え<sup>え</sup>給<sup>たま</sup>は<sup>は</sup>る<sup>る</sup>が<sup>が</sup>為<sup>ため</sup>に<sup>に</sup>此<sup>こゝ</sup>皇<sup>みま</sup>國<sup>くに</sup>へ<sup>へ</sup>法<sup>ほふ</sup>降<sup>くだ</sup>り<sup>り</sup>お<sup>お</sup>な<sup>な</sup>り<sup>り</sup>  
おと<sup>と</sup>ふ<sup>ふ</sup>や<sup>や</sup>お<sup>お</sup>れ<sup>れ</sup>頃<sup>ころ</sup>ハ<sup>ハ</sup>お<sup>お</sup>も<sup>も</sup>も<sup>も</sup>法<sup>ほふ</sup>法<sup>ほふ</sup>通<sup>とほ</sup>り<sup>り</sup>お<sup>お</sup>も<sup>も</sup>前<sup>まへ</sup>長<sup>なが</sup>に<sup>に</sup>  
が<sup>が</sup>あ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>そ<sup>そ</sup>の<sup>の</sup>仲<sup>なつ</sup>間<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>賞<sup>あたま</sup>罰<sup>ばつ</sup>を<sup>を</sup>掌<sup>つかさど</sup>り<sup>り</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>そ<sup>そ</sup>の<sup>の</sup>お<sup>お</sup>が<sup>が</sup>神<sup>かみ</sup>武<sup>ぶ</sup>  
天皇<sup>てんかう</sup>様<sup>さま</sup>の<sup>の</sup>時<sup>とき</sup>より<sup>より</sup>お<sup>お</sup>れ<sup>れ</sup>政<sup>せい</sup>事<sup>じ</sup>を<sup>を</sup>天<sup>あま</sup>子<sup>こ</sup>様<sup>さま</sup>法<sup>ほふ</sup>一<sup>いつ</sup>人<sup>にん</sup>乃<sup>なり</sup>手<sup>て</sup>へ<sup>へ</sup>悉<sup>ことごと</sup>  
く<sup>く</sup>引<sup>ひ</sup>受<sup>き</sup>け<sup>け</sup>給<sup>たま</sup>ひ<sup>ひ</sup>お<sup>お</sup>れ<sup>れ</sup>の<sup>の</sup>時<sup>とき</sup>命<sup>あま</sup>令<sup>めい</sup>子<sup>し</sup>從<sup>したが</sup>ハ<sup>ハ</sup>ぎ<sup>ぎ</sup>給<sup>たま</sup>は<sup>は</sup>る<sup>る</sup>長<sup>なが</sup>體<sup>たい</sup>彦<sup>ひこ</sup>の



新編武家傳

如ごときものハ皆みな誅ちやう罰ちやうせらるましき一さととでどぎれおれより活くわ  
 代ごていては強ちやうきやうの天智てん天てん皇わう様の大た後ご唐たう朝てう乃の郡ぐん縣けんの制  
 度どをあ活くわ移い一ちかまれ善美びを盡一くるる活くわ政せい事じを行ひ  
 たまひ一ちりさおふ太平へいがちのとはげりお上じやう下げとも自みづか  
 然ぜん一ちやう遊ゆう情じやうふちり色この縁えん故こよそだんく天子てん様の  
 活くわ威い光くわうう薄くちり終小せう源げんの頼朝ちやうふ總追すい捕ぼ使しとは  
 役やくを活許きょ一ちり外とサアおれらと天子てん様ハあれとも  
 ちきが如く武家ぶ乃の威い執しやくハ追く盛りちのと来きす一  
 たおとふすちのおち後醍たい醐ご天てん皇わう様乃時とき天てん子し様の活くわ

威い光くわうが武家ぶ乃の威い執しやくハ追く盛りちのと来きす一  
 事ことハ追く盛りちのと来きす一  
 事ことハ追く盛りちのと来きす一  
 事ことハ追く盛りちのと来きす一











なくならしむる来たる迄終つひに慶應四年あきぶせの秋活政事を天  
 子様へ還かへし奉たてまつりしおとどぎおとどぎおとどぎ大名ももどりめ頼朝よりとも  
 時代の畠山はたけやまだ乃千葉ちやうせんだのとりよハ丁度ちやうど今乃大庄屋位おほおやうや  
 乃その少すくなりおれが軍功ぐんきゆうあり官位くわんいを得えありひを諸しよ  
 國くにの守護地頭しゆごぢちゆうだ乃とも盗賊たうぞくなむの防ふせぎを守りお役やくを  
 掌つかさどりし段々だんげん天子様てんしやうの法威おほ光くわうりなるありし後あとひ天  
 子様へ納せまむへき年貢ねんぐを横取よこどりかり又また撰著せんしやくをきめり  
 居ゐたおとどぎおとどぎおとどぎののち後あと應仁おうにんの頃ころハ天下てんか大乱たいらん  
 ありかやうなる悪事あくじをしきも誰一人たれひとりとがむるものも







夫てハ後政事ヲ害がりあるとよりけがなきれを  
 是迄大名の公方様を真まこと乃君のやう思おもひ上かふ天子様を  
 正真ただまことの主君のあるをますれ居ゐる一旦騷動さわごうの  
 あり時ときふ人ひと乃心こころが向むくふより更さらに落付おちつくとる後を  
 既すでに卯うの年公方様の後政事奉還ほうげんの  
 ぎり天子様より諸大名を京都へ後政事を上あ上あ  
 京みやこせー大名の謀まことふりつりやれとるみよりよ候まハ皆病みなやまひ  
 小托かたつけ日和ひよりを見み居ゐる所ところが伏見ふしの一戦いちせん右軍みぎぐん内務利うちむろ  
 根ね根ねとめき我われもくと上京かみみやこせーとたりナント







又もひとうご郡縣ごんけんのよひのごりごにご説ご據ごハごすごでごリご 緒國しよこくへご新ご  
ご縣ごがご出ご來ごくご諸國しよこくのご百ご姓ごハごあごんごとごりごくご居ごるご并ご是ご迄ご乃ご  
ご中ごろごちごろご活ご用ご金ごやご割ご増ご年ご負ご杯ごのご苦ごくごもごちごろご誠ご  
ご小ご有ご難ごキごあごとごだごとご之ごあごくご喜ごんごくご居ごるごでごもごおごびごらごくごのご  
ごあごれご小ごてごもご郡縣ごんけん乃ごよごきごあごとご哉ごあご志ごりごちごきごれご并ごきごきごくご  
ご段ごくご活ご活ごりご通ごりご天ご子ご様ごのご大ご名ごをご廢ごくご新ご縣ごんけんをご活ご置ご  
ごちごろごちごろごハご元ご來ご活ご自ご分ご活ご所ご持ごのご物ごをごりご之ごさごれご活ご  
ご事ごちごろご且ご當ご時ごのご活ご改ご事ご乃ご活ご趣ご意ごとごりごのご活ご聊ご活ご  
ご自ご分ごのご活ご為ごてごちごろごちごろご日ご本ご乃ご人ご民ごがご安ご樂ごすごリご



暮せらるやう外國人の馬床小されぬやう日本の國威を  
海外へ輝からかやうもの有難ありがたき法思召あがたり出いたること家  
道みちを皆みなくよく心得こころえる夜分寐やぶるも早ねすれぬやう  
たゞこればかりはせん

② 舊平

成程なるほど只今の法おえ話ちりと大名の座たまに小ぢなるとも縣乃出え  
来きたるも皆みな天子様か我われる乃為ために小ぢなると有難ありがたき思召あがごと  
と事ハよしからり外ほかに保たもつ僕わがもたまに函はこ知ちの出い来  
ぬぬたうがぶぶがぬおれハ先まづみれままで穢え多たるどどり物ものハ赤あ



人とらとらよりも平人へいじん乃すなは附合つけあの出来ぬら一種別いちしゆべつの人ひと柄へいていざら  
 我れわれをを傳つたへへ新あらた以來いらい平民へいじんと同おな様さまふたなられれ又また昔むかしのの家いえ  
 柄へい扱あ式しきととらら子物こぶつハハトトントント法ほ用ようののああぢぢくく昨日けふままぢぢくく穢けが多たよよ非ひ  
 人ひとよりもいいははれれ平民へいじんとと話わをを手ておおけけささししもも出来ぬら人ひとがが今日けふ  
 ハハ制せい止し聲こゑととおおけけ馬車ばしやふふ乗のりるるおおけけあるあききくくもも更さらふふ法ほ  
 お手てののひひぢぢううききふふぬぬナナントントさされれででるる日本にっぽん乃すなは古風こふうががままするるままわわ  
 廢物へいぶつととささししひひ上かみ下しも乃すなはちち別べつががちちかかくくああるるおおししててるるごごらら  
 まませんんりりますすとと公方こうほう様さまのの時とき世よふふハハ法ほ老らう中ちゆう若わく年ねん寄よふふ  
 どのどの法ほ役やく人ひとハハ大名だいめいぢぢううれれババ勤つとめめるるおおととのの出で来きはは法ほ

開化問答  
 卷上



側ハ五千石以上たとの町奉行ハ三千石高たとの國

守ハどうも格式があれとう又田舎杯でも家柄百姓ハ

多乏しきも村乃穿合ふハ上席小中も杯とらふて誠不

威儀正しき大とでぶきおれが今てら家柄も格式

もいぬ物も昨日も天祥様を荷け四文商賣

をいぬ人も今日ハ政府乃後役人たといふも威張

あるくナントめらふ下賤も人が治政事をきこくと誰

有難く心服するものハかく高生同根子心得たる非

人ふ馬鹿もそれと立腹せぬものもぶきを弁すひき

あつかりく... 守... びん... 多... 威... 天... 威... 有... 人...







あり一の目ふりて手足は二本とて一はさきより外  
ひとめ てあし ふたへん さきより いびきより  
 する人間といふ物ハ一は二眼四足は出来て居るも  
ええ あ くろがたーき る  
 強を見れば人間の釣合ハ何乃後五位ても推して八兵衛  
こ ええ うあひ まふ いちごめ おんべ え ちうべ  
 ても同等なわけでもございせんうたは釣合の同等なわけ  
どうと ええ ええ ええ  
 ありはもとよりや天道様乃法思召さくたれを人間の権  
えり とぞ ちうかた とぞ こが かた  
 利と外権利とハ自分の心身軀を自由中一我身軀  
ええ とぞ あ とぞ  
 乃安穩を謀り自分の所持の物を自由中さすもあつふを  
えり ひと が くハ せえ ため あふ あ  
 すれば権利ハ人ふ害を加へ世間乃為る法を犯すことなき  
ひと さき た こ あ あ  
 へつけよとトニト人ふ妨げられるともなき皆同ト扱  
ひと さき こ あ あ

小天道様より負戴し居る物でございせん、  
え ちうま より あ か い る もの で ござ い せん 、



小天道様より頂戴し居る物でござぬされハ華族  
 ても飲やお酒を賣る人ても其れ權利を達するを  
 同ト事あり華族の命も飲やお酒乃命も命乃  
 重きものと云同様華族百萬兩乃金も飲やお酒一四文  
 の錢も已が物と云ふれを守り心も同様でござぬ  
 まゝ人間の有様と云ふ物がござぬと云ふは貴賤  
 貧富家柄様式の類あり其れ中ハ華族もあり士  
 族も有り豪家もあり貧乏人有り其れ外されど其れハ天  
 道様あり命と云ふ事ハ其れ人間仲立ち乃私一の



定めあり 唯人間世界の有れよりものであざれらるる  
 此れ有れり 貴賤貧富乃る別が出來るる 此れ大本  
 を穿鑿すれば 大低此れ人の氣量 由るまゝとあり 其の  
 次第ハ ちぢちぢと 分明てあざれ 古き言葉より 人學を  
 ざれば 智なり 智なるものハ 愚人なりと云ひ されば  
 賢人と愚人との別を 學ぶと 學ぶがふふと 由る 出  
 來たるもので あざれ 又世の中 亦あづり 一き仕事も 何  
 事 やすき仕事も あざれ 此れあづり 一き仕事も すれば  
 者を 身分重き人とならば やすき仕事を する者を 身分

賢人より 愚人の心を 用ひ 必死する 仕事ハ ちぢちぢと され 由る



輕かろき人ひとより總すべく心こころを用もちひ必かならず死しす仕し事ごとハむづかしくそれ由よし多おほく  
 學者がくしや政府せいふ乃すなはち役やく人ひと又またハ大おほ商人あきんど奉ほう公こう人にんを夥あま多く召め使つかふ大おほ  
 百姓ひやくしやう乃すなはち身み分ぶん重おもくしき貴たかき者ものておぎぬ貴たかけし  
 ばあひのづから其その家いへも富とほく下くだる者ものより見みまは及およびぬ  
 やりやれどその本もとを尋たづねば唯ただ其その人ひとハ學がく問もん乃すなはち力ちから  
 が何なにもとぢきこころ由よしり其その相あひ違ちがひ出で來きたる乃すなはち天てん  
 より定きまつたる約やく束そくてをさきやうせん諺ことわざ云いふ天てんハ富とほ貴たかきを  
 人ひとハ與あつすしきされを其その人ひとの傷いたみ與あへふより外ほか  
 されば人ひとハ生なま身みのちがひ小こ貴たか賤ひん富ふのちがひ別わかハちがひき大おほ







忘香  
情之味  
若





とふく唯生れくつを後乃勤由多生くるにけごお

ぎね又家柄や格式の事を彼是論じやうきねりまじ

既り前ふも大名乃そぐめ誠活活早先通りふれ人ハ時

勢と先祖乃活蔭とふ依く人の尊敬も受け高貴乃身

分ともやうそ居たふさふく時勢の變遷やれそ

当時活用るやきも據おぎりませんすでふ昔一の名家

の子孫今ハ民間ハ零落く居るがが沢山おぎりみまこ

足下の活論でハ公方様乃以役人ハ大名旗本の携

家柄格式を以て其れ跡役を受継ごさう誠よきやう

おちろ 居る こと せん よ 色 び



予おち思る居る事のこハ官を世ふすらるる色く弊が  
 害ハのある事だと和こ漢かんもも物あ識しハひどくももくり事事  
 ておぎにおれ予予就つ馬ま床とげたももハむの一法は  
 老ら中ちゆうを勤て居る大名なが登城じやうをすけ折柄へ大た乃乃近ま  
 邊へみと米あ屋やの話を不圖ふ駕か籠かの内より少付しハ此頃このころハ  
 米あの相場さう上じやう物ぶつみと大た抵たい兩りやうふ六斗と五ご升しやうておぎにおれと子  
 を耳ふ挿と法所しよふ至り同列りやうふ向ひく諸しよ君きん當たう時じ乃乃  
 米あお場を法存ぞんトあるやと問ひハ一い同どう志しと若へハ  
 かバ志しとり顔かみとく古お頃ハ兩ふ六斗と五ご升しやうと一升しやう







の政事せいじてハおぎんをおせんおれおせお慢お小お暴威おのお振おひ  
 法お用おたおりお法免おたおりおりお文字おをお附おりお石おてお材木お  
 てお人間およりお貴おくおりお又お武士おふおハお切捨お法免お杯おとおりお  
 法おがおありおりお百姓お丁人おをお切殺おしおあおまおいおぬおりお事おがおま  
 ざおるおチおントお去おりおておハお百姓お丁人お乃お命おハお已おのお物お了おハおな  
 くお武士お乃お借物お同お扱おみおりお理おふお悖おたおまおとおりおおおがおりおるおんおり  
 去おれお畢竟お人おのお有お格おのおきおりおりお権利おとおりお事お不お氣  
 うお附おぬお也お急おみおりお世お乃お人お小お真お乃お學問おをおしおこお人おがおな  
 かおつおたお志おるおりおおおとお思おひお外お當お時おハお政府おでおあおるお眼おが



附<sup>つ</sup>んで<sup>え</sup>天<sup>てん</sup>乃<sup>の</sup>道<sup>だう</sup>理<sup>り</sup>千<sup>せん</sup>後<sup>ご</sup>ひ<sup>ひ</sup>人<sup>にん</sup>乃<sup>の</sup>釣<sup>てう</sup>合<sup>ごう</sup>の<sup>の</sup>同<sup>どう</sup>等<sup>とう</sup>か  
 与<sup>よ</sup>と<sup>と</sup>後<sup>ご</sup>を<sup>を</sup>百<sup>ひゃく</sup>姓<sup>せい</sup>丁<sup>てい</sup>人<sup>にん</sup>小<sup>せう</sup>も<sup>も</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>き<sup>き</sup>の<sup>の</sup>バ<sup>バ</sup>な<sup>な</sup>ふ<sup>ふ</sup>奴<sup>ぬ</sup>と<sup>と</sup>り<sup>り</sup>事<sup>じ</sup>よ  
 一<sup>い</sup>第<sup>だい</sup>一<sup>いち</sup>小<sup>せう</sup>織<sup>し</sup>多<sup>た</sup>乃<sup>の</sup>祿<sup>ろく</sup>を<sup>を</sup>廢<sup>えい</sup>一<sup>い</sup>舊<sup>きう</sup>來<sup>らい</sup>乃<sup>の</sup>家<sup>か</sup>柄<sup>けい</sup>換<sup>かん</sup>式<sup>しき</sup>を  
 法<sup>ほふ</sup>用<sup>よう</sup>る<sup>る</sup>や<sup>や</sup>く<sup>く</sup>百<sup>ひゃく</sup>姓<sup>せい</sup>町<sup>てい</sup>人<sup>にん</sup>千<sup>せん</sup>苗<sup>めう</sup>字<sup>じ</sup>乘<sup>じやう</sup>馬<sup>ま</sup>を<sup>を</sup>也<sup>や</sup>る<sup>る</sup>一<sup>い</sup>誰<sup>たれ</sup>で  
 も<sup>も</sup>己<sup>おのれ</sup>の<sup>の</sup>勉<sup>べん</sup>強<sup>きやう</sup>次<sup>じ</sup>第<sup>だい</sup>少<sup>せう</sup>く<sup>く</sup>い<sup>い</sup>か<sup>か</sup>程<sup>てい</sup>面<sup>めん</sup>白<sup>はく</sup>糸<sup>いと</sup>一<sup>い</sup>も<sup>も</sup>出<sup>で</sup>来<sup>き</sup>い<sup>い</sup>あ  
 る<sup>る</sup>ど<sup>ど</sup>貴<sup>たか</sup>き<sup>き</sup>身<sup>み</sup>分<sup>ぶん</sup>み<sup>み</sup>ち<sup>ち</sup>れ<sup>れ</sup>る<sup>る</sup>ま<sup>ま</sup>と<sup>と</sup> ナ<sup>ナ</sup>ント<sup>ント</sup> あ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>が<sup>が</sup>う<sup>う</sup>き<sup>き</sup>、<sup>の</sup>西<sup>せい</sup>仁<sup>にん</sup>政<sup>せい</sup>  
 て<sup>て</sup>ハ<sup>ハ</sup>お<sup>お</sup>が<sup>が</sup>ら<sup>ら</sup>せ<sup>せ</sup>ん<sup>ん</sup>り<sup>り</sup>昔<sup>むかし</sup>一<sup>い</sup>西<sup>せい</sup>洋<sup>やう</sup>の<sup>の</sup>國<sup>こく</sup>杯<sup>はい</sup>で<sup>で</sup>も<sup>も</sup>矢<sup>や</sup>張<sup>ちやう</sup>公<sup>こう</sup>  
 方<sup>かた</sup>様<sup>さま</sup>乃<sup>の</sup>時<sup>とき</sup>代<sup>だい</sup>の<sup>の</sup>振<sup>ふる</sup>や<sup>や</sup>る<sup>る</sup>暴<sup>ぼう</sup>政<sup>せい</sup>を<sup>を</sup>初<sup>はつ</sup>た<sup>た</sup>お<sup>お</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>を<sup>を</sup>ふ  
 だ<sup>だ</sup>り<sup>り</sup>百<sup>ひゃく</sup>姓<sup>せい</sup>丁<sup>てい</sup>人<sup>にん</sup>が<sup>が</sup>段<sup>だん</sup>々<sup>ぜん</sup>開<sup>ひら</sup>く<sup>く</sup>る<sup>る</sup>千<sup>せん</sup>後<sup>ご</sup>ひ<sup>ひ</sup>も<sup>も</sup>此<sup>こゝ</sup>法<sup>ほふ</sup>ハ<sup>ハ</sup>理<sup>り</sup>不<sup>ふ</sup>

孝<sup>かう</sup>と<sup>と</sup>居<sup>い</sup>る<sup>る</sup>事<sup>じ</sup>ハ<sup>ハ</sup>文<sup>ぶん</sup>事<sup>じ</sup>ハ<sup>ハ</sup>力<sup>りき</sup>を<sup>を</sup>盡<sup>じん</sup>す<sup>す</sup>事<sup>じ</sup>ハ<sup>ハ</sup>義<sup>ぎ</sup>を<sup>を</sup>盡<sup>じん</sup>す<sup>す</sup>事<sup>じ</sup>ハ<sup>ハ</sup>



愕おどろて居ゐる者ものは其その政事せいじハ其その助達すけだちだと下くだるよを議論ぎろんを起おこす  
 政府せいふへ迫せまる改正かへんせいを請まをひし不ふ政府せいふより訴う通とり改か正せい  
 正せいしきよりハ自し分の為ために不ふ都と合ごうゆ急きゅう暴威ぼういを以もつて無む理り  
 子こ押伏おしおんとし百姓ひやくしやう丁人ていじんハ承服じやうふくせし終つひ不ふ政府せいふと百  
 姓しやう丁人ていじんとの間まに不ふ和わを生なじし政府せいふを押倒おしたせし例れいが度ど々々  
 あると此こゝ事こと々々が其その勢せいれを今いま迄まで日本にっぽんの百姓ひやくしやう丁人ていじんを  
 不ふ政府せいふの大切たいせつなる権利けんりを暴威ぼうい乃な為なす押伏おしおられ慢まん懂どう  
 とし夢中むちゆう不ふ政府せいふに居ゐた所ところが法はふ一新いつしん以来いらい其その権利けんり  
 の同一どういつ不ふ政府せいふより其その法はふとすべく法はふ世せい話わをきりて其そのけ







ざおさきくたんく 以後中通り 今日えちの百姓丁人ハ元もとの百  
 姓丁人ちかと違ちがひ政府せいふ乃お法蔭おかげふく 稍ちとく自分じぶん乃もと持も  
 前まへの権利けんりを伸のびきつと成な得え且かつ己おのれの勉強べんきやう次第しだいをい  
 かるおし面白おもしろ樂たのしむていなるど貴たつとき身分みぶんふくくと  
 ぢれつるおの己おのれけぢぢぢバ我わがれ身分みぶんを顧かへみ我わが身分みぶんを重おも  
 きものめと思おもひより我わがめふも卑ひ劣れつの所業しよごふをせはい  
 中ちゆう獨どく立りつ不ふ羈きとく己おのれ一家いつかの活斗くわつハ己おのれ一身いつしんの力ちからふ  
 よろきり立派りつぱふ立たちやうふす辱ちからしきぢれハ世よの中ちゆうに  
 懼おそる辱ちからきものハ理合りあひと政府おかみの法則おきてのふく外ちゆうふ







乃備ふハ武士まむらひといふものがある平常ひらた何乃役やくもせむ  
 大祿たいろくを頂戴てうだい一百姓丁人の上うへ位くらゐ一威張ゐちやうて居る  
 是とてハおざりませんりまて百姓丁人ひやくしやうていじんも平常ひらた武士まむらひふ  
 向むかひく路ぢを避よけ席せきを譲ゆづり低頭ひきあたま平身ひらみ一貴君ききみ乃  
 法はふ無理むりの尤なほと尊敬そんけいするハ畢竟ひつじやう騷動さうどうがあつてもこの  
 人等ひとらの法はふ蔭かげふく我われも乃身躰みんたいハ迷惑めいわくがあつても  
 強あつくも思おもふやあつておざりたれハ今更いまさら百姓丁人ひやくしやうていじんを引  
 上あげ後砲ごたうを擔かげのせまをて孤ま付つ乃行列ぎやうれつもやう乃事こと  
 をさすおれもあまりといへハ無理むりな法規則はふきそくてハおざり







鬼たまひだとりたいせう子こ大小たいせうすくま佩まがとあるく人ひとちなきやうまじり成なり  
 行ゆきましたまあれらるら實じつ小西洋人せいようじん小妖惑まじされたともらうらと  
 思おもひひ弁べん元来もとより日本にっぽんのの刀かたなとりとり物ものハ彼奴等まじ乃なり國くに乃なり鉄てつ  
 砲ほうややちちかかちちああいい世よ界かい一いち番ばんだだとりとり位くらい乃なり物ものだだかからら日ひ  
 本ほん人じんががままれれをを恒とこりり腰こし小佩まがと居ゐるるハ彼奴等まじがが心こころをを  
 落おち附つけ日本にっぽんのの土つち地ぢをを何なにももくくままららのの出で来きぬぬ也や急いそ熱ねつく  
 出で役やく人じん方かたをを妖惑まじ一いちたたままをを帶おびせせぬぬやや小こささせせ勝かち手て  
 小日本こにっぽんのの操さく子こをを見み透す一いち終つひ小日本こにっぽん國くにをを乘のり取とり  
 小計畧こけいりやくかかとと思おもひひ弁べんままれれをを治おさ上めででままどど大だいをを風かぜ







りたつて今いま法あつち話り乃り理あひ令ちの一ち寸ちあつてりりなりぬき法ば  
 尤まづ千萬せんまんされふふ段だんくももづかかりりきき次第しだいがあるあるふふととててお  
 ぢぢ前まへもも法あつち話りでで通とほりももとと大名だいみょうといいふふものもの出来できたたい  
 保たも元えん以来いらい乱らん世せううづづきき段だんくく天子てんし様さま乃なり法あつち威い光こううう薄うすくくるる  
 たたふふようようをを諸しよ國こくのの守しゆ護ご地ち頭あたま扱あつかひひよよううめめるる我われ儘まま自じ在ざいななるる  
 天子てんし様さま乃なり法あつち年ねん貢こうをを横よこ取とりり居ゐるる應おう仁にん  
 以来いらい強つよひひ者もの勝かちみみくく已いま乃なり腕うで次第しだい擅しん小せう諸しよ國こくをを切きり取とりり  
 りりややれれ甲か斐ひのの武ぶ田でんだだものもの越え後ごの上うへ杉すぎだだししりり或あるハハ中ちゆう  
 國こく乃なり尼あま子こ毛もう利り九きゆう州しゆうのの大おほ支し島しま津つ四し國こくのの長ちやう曾そう加か部べ乃なり

開元月啓 卷上



属<sup>たぐひ</sup>皆<sup>みな</sup>私<sup>こゝろ</sup>に天子様<sup>てんしやう</sup>の物<sup>もの</sup>を掠<sup>かす</sup>め<sup>て</sup>居<sup>ゐ</sup>る猫<sup>ねこ</sup>が<sup>て</sup>居<sup>ゐ</sup>るこゝのて  
 ちが<sup>ちが</sup>う<sup>う</sup>な<sup>な</sup>ら<sup>ら</sup>ば<sup>ば</sup>此<sup>こゝ</sup>れ<sup>れ</sup>を<sup>を</sup>附<sup>つ</sup>従<sup>じゆ</sup>ふ家来<sup>けらい</sup>乃<sup>も</sup>武士<sup>ぶし</sup>の<sup>の</sup>横<sup>よこ</sup>  
 著<sup>ちやう</sup>者<sup>もの</sup>乃<sup>も</sup>餘<sup>あま</sup>流<sup>りゆう</sup>さ<sup>さ</sup>る<sup>る</sup>今日<sup>けふ</sup>ま<sup>ま</sup>で<sup>で</sup>ハ<sup>ハ</sup>な<sup>な</sup>ん<sup>ん</sup>の<sup>の</sup>氣<sup>き</sup>も<sup>も</sup>附<sup>つ</sup>従<sup>じゆ</sup>ふ不正<sup>ふせい</sup>を  
 飯<sup>い</sup>を<sup>を</sup>食<sup>く</sup>ふ<sup>ふ</sup>と<sup>と</sup>居<sup>ゐ</sup>る<sup>る</sup>ち<sup>ち</sup>と<sup>と</sup>で<sup>で</sup>ち<sup>ち</sup>が<sup>が</sup>お<sup>お</sup>さ<sup>さ</sup>き<sup>き</sup>今日<sup>けふ</sup>ふ<sup>ふ</sup>お<sup>お</sup>よ<sup>よ</sup>ん<sup>ん</sup>で<sup>で</sup>ハ  
 此<sup>こゝ</sup>等<sup>ら</sup>乃<sup>も</sup>理<sup>り</sup>合<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>判<sup>は</sup>然<sup>ん</sup>と<sup>と</sup>明<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ず<sup>ず</sup>なり<sup>り</sup>大名<sup>だいめい</sup>の<sup>の</sup>領<sup>りやう</sup>知<sup>ち</sup>ハ<sup>ハ</sup>不正<sup>ふせい</sup>  
 物<sup>もの</sup>と<sup>と</sup>り<sup>り</sup>議<sup>ぎ</sup>論<sup>ろん</sup>より<sup>り</sup>遂<sup>つひ</sup>ふ<sup>ふ</sup>藩<sup>はん</sup>籍<sup>せき</sup>奉<sup>ほう</sup>還<sup>えん</sup>し<sup>し</sup>と<sup>と</sup>防<sup>ぼう</sup>悉<sup>しつ</sup>く<sup>く</sup>そ  
 の<sup>の</sup>領<sup>りやう</sup>知<sup>ち</sup>を<sup>を</sup>天子<sup>てんし</sup>様<sup>やう</sup>へ<sup>へ</sup>法<sup>おのり</sup>還<sup>えん</sup>し<sup>し</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ず<sup>ず</sup>大名<sup>だいめい</sup>が  
 法<sup>おのり</sup>還<sup>えん</sup>し<sup>し</sup>と<sup>と</sup>せ<sup>せ</sup>ハ<sup>ハ</sup>そ<sup>そ</sup>れ<sup>れ</sup>家<sup>け</sup>来<sup>らい</sup>の<sup>の</sup>武<sup>ぶ</sup>士<sup>し</sup>も<sup>も</sup>知<sup>ち</sup>行<sup>ぎやう</sup>を<sup>を</sup>天子<sup>てんし</sup>様<sup>やう</sup>へ  
 法<sup>おのり</sup>還<sup>えん</sup>し<sup>し</sup>と<sup>と</sup>せ<sup>せ</sup>ハ<sup>ハ</sup>そ<sup>そ</sup>れ<sup>れ</sup>家<sup>け</sup>来<sup>らい</sup>の<sup>の</sup>武<sup>ぶ</sup>士<sup>し</sup>も<sup>も</sup>知<sup>ち</sup>行<sup>ぎやう</sup>を<sup>を</sup>天子<sup>てんし</sup>様<sup>やう</sup>へ  
 法<sup>おのり</sup>還<sup>えん</sup>し<sup>し</sup>と<sup>と</sup>せ<sup>せ</sup>ハ<sup>ハ</sup>そ<sup>そ</sup>れ<sup>れ</sup>家<sup>け</sup>来<sup>らい</sup>の<sup>の</sup>武<sup>ぶ</sup>士<sup>し</sup>も<sup>も</sup>知<sup>ち</sup>行<sup>ぎやう</sup>を<sup>を</sup>天子<sup>てんし</sup>様<sup>やう</sup>へ  
 法<sup>おのり</sup>還<sup>えん</sup>し<sup>し</sup>と<sup>と</sup>せ<sup>せ</sup>ハ<sup>ハ</sup>そ<sup>そ</sup>れ<sup>れ</sup>家<sup>け</sup>来<sup>らい</sup>の<sup>の</sup>武<sup>ぶ</sup>士<sup>し</sup>も<sup>も</sup>知<sup>ち</sup>行<sup>ぎやう</sup>を<sup>を</sup>天子<sup>てんし</sup>様<sup>やう</sup>へ

おひき... 大... 幾... 唯...







焼豆腐の方やきとうふがまるりうまうごと思ひ外何な故げ人に間まが

焼豆腐やきとうふ乃おろしふ焼豆腐の軍い乃き時とき兵べい當たうのま葉の

物もの小ちなつく腹りふとれ用もちをしけし非サ武む士しハそれ程の

用もちふまり人をた此た例めいハ既不な丑し年ねん亞ア米メ利リ加カ人トのまじめ

と渡来ら一いたしき鎧をあ持も乃の者ものハ千人にんの中ふ一人ひと

位ゐのまとふく皆く戦争せんどち顔か色しき土つち象け色しきふか

ア人間にん乃の者もの根ねハたとり外そとまさく於此こ後のち大や和まとや

野や州しゅうの騷動そうどうの時も大名な乃の家か来きたり獵人りやくにんや百姓せう乃の

方かたりまるり強つよかり一との事ことナニトあれても平常ひょうじょう大たい禄ろくを

賞しょうひ軍をあり賞ふ一との事ことナニトあれても平常ひょうじょう大たい禄ろくを



賞<sup>もく</sup>ひ軍<sup>いんぐん</sup>を商<sup>あやう</sup>賣<sup>う</sup>ふ<sup>か</sup>居<sup>ゐ</sup>る人<sup>ひと</sup>といひ<sup>い</sup>て<sup>ま</sup>せ<sup>ら</sup>る<sup>か</sup>實<sup>じつ</sup>ふ  
 無<sup>む</sup>益<sup>えき</sup>なる物<sup>もの</sup>で<sup>な</sup>ら<sup>ず</sup>又<sup>また</sup>世<sup>よ</sup>乃<sup>ひと</sup>人<sup>ひと</sup>が<sup>よ</sup>く<sup>い</sup>ふ<sup>こと</sup>言<sup>こと</sup>ふ<sup>徳</sup>徳<sup>とく</sup>  
 川<sup>かは</sup>家<sup>け</sup>の<sup>ト</sup>時<sup>ど</sup>代<sup>が</sup>より<sup>ま</sup>勤<sup>ま</sup>王<sup>の</sup>と<sup>い</sup>ふ<sup>あ</sup>と<sup>銭</sup>銭<sup>せん</sup>唱<sup>な</sup>へ<sup>る</sup>今日<sup>けふ</sup>あ<sup>ら</sup>ふ<sup>芽</sup>芽<sup>め</sup>  
 出<sup>で</sup>度<sup>たぎ</sup>時<sup>ど</sup>世<sup>よ</sup>々<sup>々</sup>人<sup>ひと</sup>ハ<sup>た</sup>大<sup>たい</sup>抵<sup>たい</sup>武<sup>ぶ</sup>士<sup>し</sup>あ<sup>ら</sup>く<sup>是</sup>是<sup>これ</sup>を<sup>以</sup>以<sup>も</sup>て<sup>見</sup>見<sup>る</sup>れ  
 ハ<sup>お</sup>武<sup>ぶ</sup>士<sup>し</sup>乃<sup>の</sup>功<sup>こう</sup>ハ<sup>た</sup>大<sup>たい</sup>功<sup>こう</sup>だ<sup>と</sup>い<sup>ふ</sup>并<sup>なら</sup>び<sup>と</sup>い<sup>ふ</sup>事<sup>こと</sup>ど<sup>い</sup>ふ<sup>れ</sup>ハ<sup>お</sup>思<sup>おも</sup>ひ<sup>違</sup>違<sup>ちが</sup>ひ  
 此<sup>こ</sup>れ<sup>の</sup>人<sup>ひと</sup>等<sup>ら</sup>の<sup>了</sup>簡<sup>かん</sup>を<sup>あ</sup>ら<sup>ぬ</sup>や<sup>う</sup>い<sup>ふ</sup>もの<sup>で</sup>あ<sup>ら</sup>ず<sup>お</sup>ら<sup>る</sup>も<sup>う</sup>也<sup>なり</sup>  
 勤<sup>ま</sup>王<sup>の</sup>を<sup>う</sup>唱<sup>な</sup>へ<sup>た</sup>人<sup>ひと</sup>等<sup>ら</sup>ハ<sup>お</sup>己<sup>おのれ</sup>等<sup>ら</sup>乃<sup>の</sup>身<sup>み</sup>分<sup>ぶん</sup>食<sup>じ</sup>禄<sup>りやく</sup>ハ<sup>お</sup>不<sup>ふ</sup>正<sup>せい</sup>なる  
 の<sup>だ</sup>と<sup>い</sup>ふ<sup>と</sup>あ<sup>ら</sup>ず<sup>より</sup>と<sup>い</sup>ふ<sup>ぞ</sup>日<sup>ひ</sup>本<sup>ほん</sup>乃<sup>の</sup>真<sup>ま</sup>正<sup>せい</sup>の<sup>法</sup>法<sup>ぽう</sup>主<sup>しゆ</sup>君<sup>くん</sup>なる  
 天<sup>てん</sup>子<sup>し</sup>様<sup>さま</sup>を<sup>お</sup>世<sup>よ</sup>々<sup>々</sup>何<sup>なに</sup>も<sup>な</sup>ら<sup>ず</sup>此<sup>こ</sup>等<sup>ら</sup>の<sup>慶</sup>慶<sup>けい</sup>置<sup>ち</sup>を<sup>お</sup>正<sup>ただ</sup>しく<sup>な</sup>さ<sup>る</sup>人<sup>ひと</sup>也<sup>なり</sup>

開化朝野  
 卷上



心組こころぐみあそいあそい心配こころをくろく苦勞くるわういさされたるあそくていざいざ  
 されい世よの中ちゆう乃な蠅あぶらむし武士ぶしの飯いひを食くひをどどいさすやいぬ  
 と扶持ふちまい米まいふさびり付つき居ゐるものとい雲くもと土つちふどち  
 がふさそそいざいざされ先ま武士ぶしの身み分ぶん乃な不正ふせいなるをけ  
 と役やくふたぬきけていざいざささく四よ民みんを論ろんせん皆みな二十  
 歳さいふくれバ籤せん引ひき兵へい士しふりおとすといさけハもと日  
 本にほん國こくといハ天子てんし様さま法はふ一人ひとりよりまた也なり日本にほん國こくといふてハ  
 ざいふぬ日本にほんふ四千よんせん萬まん乃なり人ひと間まが住す居ゐるや急いそ日本にほん國こくと  
 いふをけあそ外國がいこくより日本にほんへ耻ちぢ辱りやくをあそつたあそとがあ

天子てんし様さま一人ひとり乃なり止とどめ守まもりてハいざいざ又また日本にほん國こくと  
 日本にほん國こくといふてハ











此れがそれ職分を疎ふ一唯法外不威張るの之  
 居るは却て百姓丁人の害をなす理を實り厄  
 取物たるがざりませんうさき段々法詰り通り法一  
 新以来武士乃權威をそぎ四民同等不法取扱な  
 きはあつハまこと國乃為四民同等不力を盡さぬハ  
 かり外まひ土生華族より平民に至るまで二十歳  
 ちれハ兵士ふちうりりけてがざり且此事ハ今新  
 ちりまつたるはとてをがざりぬむの天子様が法政  
 事をなさる時分ハ矢張今と同様ふく男子二十



歳ふぢれハ丁壯ちのきとらふ兵士いんきの部ふ不入い軍團ぐんだんとて  
 國くにふ屯とん存ぞんグあり一年いちねんふ幾度いくたひとらふぢれぢれありあ  
 つまり調練ちやうれん乃のち稽古けいこをや又上番まじやうばんと唱なへ順番じゆんばんふ  
 京都きやうとへ上のぼり天子てんし様さま守護しよご乃のち兵士へいしとなり或あるハ防人ぼうえいと  
 九くおへ至いたり外國ぐわいこくの防禦ぼうえいをやす杯さか恰ただも今いま乃のち法はふ  
 規則きぎとお事ことておぎぎれさくく足下あしげハあれ頃人ころひの帯おび  
 刀たせぬさくく我われ苦勞くろうふ思おもハ身み西洋人せいやうじんふ妖惑やうかくされく  
 居いる杯さかハあるくハ沙汰さたのあぎり腹はらがよどまるちやうふ  
 思おもハあ外がいむのハ刀かたな乃のち双ふた五寸ごすん以上いじやうの物ものをも持もとおぎき

小四せうし討うちを受うける事ことハあ喜よろこびの軍ぐん正せい式しきとらふ書しよ籍じやく



小討さつとを受うるといふ事ことに延喜えんぎの彈たま正式せいしきといふ書しよ籍せき不ふ見みえしうしたそれゆゑ右大臣うだいらんきだいらん左大臣さだいらん杯さかといふ重おもき官くわん負おふとも天子様てんしやうの法おほり許りぐちうちきいの劔けんを佩あひく法ほ所じよへ昇のぼるあるるたたでまきません唯ただ前まへふ法ほ話わした軍團ぐんだんの兵へい士しハ始はじめ終つひ刀かたなをましり居ゐたあるる見みえし外ほかおれが乱らん世せ乃な時とき代だいふハ一いつ本ぽん半はん分ぶんて不あ足たり少くて右みぎ手てのたのた太おほ刀ただのとらふと三さん本ぽんも四よ本ぽんもさしたあるるでおさしれそ乃な風かぜ習しよぐ今いまの世よふ遺のちく武ぶ士しハあなるる刀かたなを佩あひく乃なやう思おもく居ゐる外ほかさし今いまの法ほ時とき身みてハ刀かたなハ真まことふ







ざれおれゆ急理り為ふハたゞ一團ふちるる攻く来  
アフリカ 西弗利加乃黑奴  
セマ 攻く来  
 ふも侘入り道のたぬふハ世界が一團ふちるる攻く来  
セマ 世界が一團ふちるる攻く来  
 たかふとくく懼るるけでハぢぢぢぢぬおれおそ一本お  
ウツ 一本お  
 乃刀を頼ふし居る時節でハなく日本國中の人  
トセ 時節でハなく日本國中の人  
 のあふんかぎりハ力を盡し國の威光を落さ  
ウツ 國の威光を落さ  
 るが真乃大和魂ておぢぢ何学法方の法話ふ日本  
マコト 真乃大和魂ておぢぢ何学法方の法話ふ日本  
 人が刀を頼ふし居るる了簡あてハとくを  
トシ 了簡あてハとくを  
 日本ニッポンの威光を萬國へ輝す  
カク 輝す  
 けふハ世のぬと實ふ  
カク 實ふ  
 法尤も法言葉と思ひ外されハ皆く法上のあふる  
カク 皆く法上のあふる



たき法趣意を知ら國乃ため身の多め兵士とせりて  
外國の侮を防ぐ實平日本不生きたる人乃當  
然乃職分ておごり

④ 舊平

成程段々との法活ふく是迄の疑念大方とけき

たさすもむがく僕ハまぐ承知が出来ぬとこのおごり

是ハ是下乃法活ふ天子様の法直ふ法政事をしき

皆ハ一つも法自分乃禁聲榮花をたためておごり皆民

百姓乃安樂ふ世涉りの出来ぬとこのおごりた



いひぢきりぬりきどまづあんなら法一新いつしん以来いらいやんでもいむやいりし諸しよ  
うんぢやう運上うんぢやう乃な穿議せんぎをしりしれん屁ひをはなたしましすで運上うんぢやうとあらしましたらばしては民たみ百ひゃく姓せい安あん樂らくのために為なすべ法ほう政せい事じ  
 可かぢぢきりぬりナニトトぢぢれれででハハ民たみ百ひゃく姓せい安あん樂らくのために為なすべ法ほう政せい事じ  
 哉やぢぢきりぬりままをまささきき外がいすすひひろろききゆゆ急きゆう下かりり乃な一いち口こうををぢぢりりハハ  
まぢぢれれ頃ころ天てん子し様さまハハ喘ぜん息そくをを法ほう累らいひひぢぢききるる何なに故げととししハハ  
いままりり頻ひん不ふ祝しゆととああららししままるる杯はいとと悪あく口こうををりりぢぢりり居いりり殊こと不ふ阿あららるる  
せんせい先生せんせい乃な法ほう話わハハ仁にん政せいをを行こうふふハハ税ぜい歛かんをを薄うすくくすすぢぢりり  
ありりとといいふふままんんででもも運うん上じやうをを軽かろくくすす名なののがが第だい一いち乃な仁にん政せい  
だとと聞きききままりりたたぢぢりりままりり引ひきき之これ當たう時じととるる政せい府ふのの法ほう後ご



人が蚤取眼のこころまきをえんご運上えんごをせき穿鑿せんさくし居

らおち運上えんご既も子公方様乃頃くわうさま亦もハ百姓乃諸年貢の外あやうさま

ハ運上えんごといふうんごものハたうどたゞたうど當時たうどてハ町

地面家作ぢめんかさくハ勿論もちろん芝居寄場しやいけいば貸坐かざ敷娼妓しやうき藝妓げいぎ不ふ至

るおとまで運上えんごをおと取立とちときとれとまとれと未ハ職人のま

仕事しごと不付ふくも商人あきんとのあき高小付あきあひだうくも運上えんごをおと取立と

ちおときとれと思おもひと外あひだナントなおれとでハおと人と不ふ天

子様こさまがおと法ほう自じ分ぶん乃の百姓町人のひやくしやうちやう物ものを取上とるとおととだととと

くおとあとまりと酷むごてハおとおとぐとらとんとろとそれとゆとえと下とくと乃とものとが







されどかく法話ちんちやを仕掛しかけたこのふハまき一ひと僕ぼく乃なり愚ぐ  
 論ろんも述のべられバありませんダカ保い一いつ何時いつも  
 べらくとも志しやべりつづけふしく居ゐてハ看客かんかく諸君しよくんが  
 法ぽ退屈たいくつなまの多おほい開次かいじ良らうもち奴やつハ名前なまえも似合おあ  
 ぬ開ひらけぬ野良やらうだおえと法ぽ叱しりちおておぎう後ごろあのろ  
 まいけい此こ辺へでい一いつ服ふくやらかしくあるハ下かのま卷まき乃なり楽たのしみ  
 小こいろ〜〜ませ〜

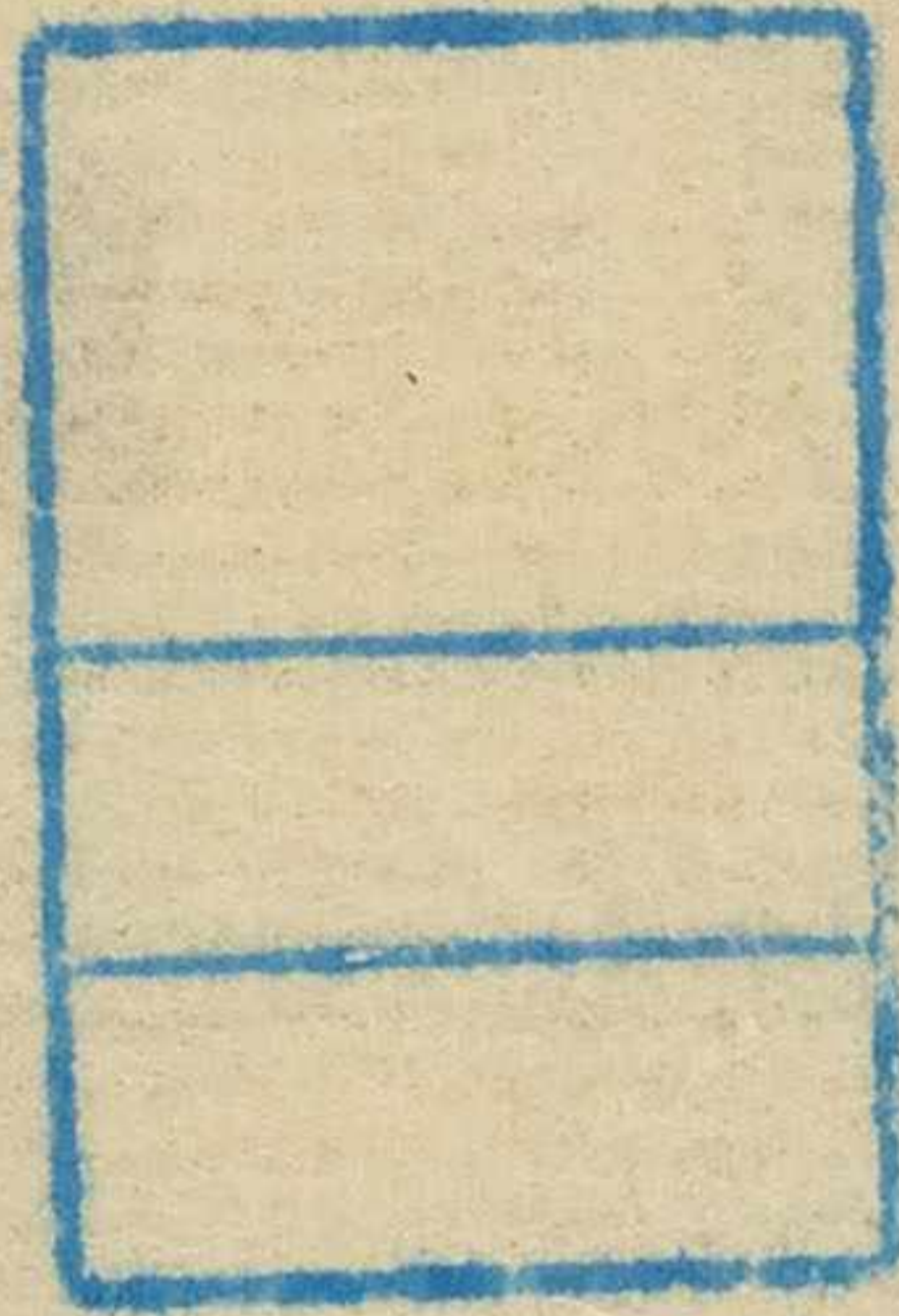
開化問答 卷上 終

国立国語研究所

近代語研究室



24301



藤奈村

降  
个  
門  
本  
元  
一  
糸  
上  
分  
入  
通  
个  
言  
石  
多  
三



堀内庄作

国立国語研究所  
近代語研究室

国立国語研究所



1001168077